

ルネサンス期エンブレムブックにおける椰子の表象

松 田 美作子

椰子科の植物、つまり棕櫚やナツメヤシ、ココヤシなどは、プリニウスに言及するまでもなく、葡萄、オリーブについて有用とされる植物である。¹ 草木、花といった植物に象徴的意味を与え、花言葉などを生んだ西洋の寓意の伝統において、椰子科の植物も様々な表象を展開してきた植物である。そのうちの棕櫚（和棕櫚）は、日本で産する椰子科植物のうち、もっとも耐寒性があり古来より親しまれてきた唯一の椰子科植物であった。枕草子 40 段「花の木ならぬは」にも、棕櫚（スロ）の木への言及がみられる。明治維新以降、わが国では海外の著作に見られる棕櫚とは異なる椰子科植物が「棕櫚」と翻訳されたり、palm tree に対する訳語に混乱があったように思われる。そこでルネサンス期のエンブレムの考察に入る前に、イエス・キリストのエルサレム入城を記念する復活祭一週間前の日曜日（Palm Sunday）を一例として、この点を検討したい。この日の呼び名は、日本カトリック教会では枝の主日、または受難の主日、プロテスタントでは棕櫚の主日あるいは受難の主日、聖公会では聖枝祭などであり、日本カトリック教会ではソテツの枝を、ロシア正教会などでは猫柳を代用しているが、オリーブや椰子といった常緑樹の枝を用いるのが通例である。使われる枝が地域によって入手しやすいものであり、異なることとも関連するが、明確に棕櫚とそれ以外の椰子を区別してこなかったようで

ある。² 棕櫚もそれ以外の椰子も、椰子科のあらゆる木は常緑高木であり、ラテン語では *palma*、枝の主日は *in palmis* である。しかし棕櫚とそのほかの椰子は、科は同じでも属は異なるのである。棕櫚属は中国原産、日本、中国、ヒマラヤに6～8種ある。高さ3～5メートルほどで、幹の繊維が固着し棕櫚毛で包まれている。一方、たとえばナツメヤシ属は20～30メートルにもなり、葉形など姿かたちは大変異なる。唯一ヨーロッパ原産の椰子で、地中海沿岸地域に自生する *Chamaerops humilis* (英名: *European fan palm*, *Mediterranean fan palm*, *dwarf fan palm*、日本名: ヨーロッパウチワヤシ) は小型で、樹姿が棕櫚に似る。しかし、棕櫚のように単立ではなく株立ちになり、唐棕櫚に似るが葉柄に棘があるところが違う。³ 日本聖書協会による『聖書』(1974年、旧約は1955年改訳、新約は1954年改訳)



ヨーロッパウチワヤシ

や、『新共同訳聖書』（1987年）において、椰子科植物に言及される箇所は、30箇所あり、訳語として〈なつめやし〉は、出15:27、〈やし〉はヨエ1:12、〈棕櫚〉はイザヤ9:14、ヨハネ12:13などにてでくが、日本基督教団出版局発行の『聖書事典』（1961年）によれば、それらはすべてナツメヤシのこととしている。⁴ それより新しい2002年発行の『岩波キリスト教辞典』には、〈椰子〉および〈ナツメヤシ〉の項はない。〈棕櫚〉の項（553頁）において、「なつめやしとも訳される。」とあり、また〈エルサレム〉の項内のエルサレム入城において、「・・・木に登ってシュロ（＝なつめやし）の葉をまく人物や基督の通り道にマントをしく人物・・・」と説明されている（160-161頁）。わが国の翻訳の歴史において、本来はナツメヤシを指すものの、この木を日本人にとってより身近な棕櫚と記述し、両者が不統一に用いられてきたことを伺わせる。

しかし、椰子の木自体は維新後、急速に世に知られていったと思われる。わが国では、椰子類のうち棕櫚は、江戸時代すでに大名庭園に植栽されていたが、南洋産の椰子は、明治開国以後、国内で栽培が広まっていった。明治三十一年十一月落成したという大隈重信伯爵邸内のコンサーヴァトリとその南北に広がったホットハウスには、外国から運ばれた蘭科、および熱帯植物が所狭しと陳列されていた。『風俗画報』第273号（明治36年）には、その内部の挿画が彩色口絵として付されており、土木の部に説明が載っている。「挿画は即ち中央室のコンサーヴァトリにして、伯爵夫人が賓客を招きて、快樂を俱にするなり、・・・」とあり、画面左には、シンガポール産やフィリッピン産の椰子の木がみられる。⁵〔図1〕椰子の木など熱帯穂植物を育てるホットハウスやコンサーヴァトリについて、こうした雑誌に詳しく説明が載っていることから、椰子の木を棕櫚と訳してきたのは、一部の伝統であったかもしれないが、文学作品の翻訳にも palm tree を「棕櫚の木」としているものがあり、これについては後述する。本



図1 『風俗画報』第273号(明治36年)

論は、ルネサンス期のヨーロッパにおけるエンブレムブックを中心に椰子の木の表象をとりあげ、この樹木に託された象徴的意味の受容と変容を探るのであるが、明治以降「棕櫚」と訳されてきたものの、実際は椰子（とくにナツメヤシ）であることを確認し、これらの木の区別を明白にする機会ともしたい。

具体的なエンブレムをとりあげて考察する前に、ナツメヤシ（date palm）について解説しておく。聖地に育つこの木は、聖書中に散見されるので、まず聖書からの記述を挙げながら説明したい。ナツメヤシは北部アフリカ、西南アジア特に死海当方の溪谷に自生、砂漠ではオアシスの周辺に育ち、(出 15:27) その姿は詩的に表現されている（詩 92:12、雅歌 7:7～9）。古代メソポタミアで5、6千年の昔、最初に計画的栽培をされ

た果実樹であった。⁶ 茎から砂糖をとり、酒を作り、果実は食用、その殻はらくだの飼料に、木材は建築材に、葉でかご、むしろや網を編む。花輪はオリーブ同様、戦勝者に祝いとして与えられていた（ヨハネ 12：13、黙 7：9）。前述したイエスのエルサレム入場は、四福音書に並行記述されている（マルコ 11：1－11、マタイ 21：1－11、ルカ 19：28－40、ヨハネ 12：12－19）。それを歓迎する人々が葉のついた枝をしいたというが、ヨハネの福音書 12 章 12－13 節には群衆が、「イエスがエルサレムにこられると聞き、なつめやしの枝をもって迎えにきた」とあり、樹木を特定している。これは、当時のメソポタミアやエジプトの宗教でナツメヤシが聖樹とされていたことと関連している。大英博物館所蔵の壁画、古代エジプトのテーベの第十八王朝の岩窟墓で、庭を描いた壁画にナツメヤシが描かれているが、⁷ 常緑であり、葉や茎も実も有用であったこの木は、生命と繁栄のシンボルであった。また、旧約聖書外典マカビー第一書 13：37 および第二書 14：4 にみられるように、この木はすでに紀元前 2 世紀マカビーの時代に勝利と歓びのシンボルとみなされ、枝を戦いの勝者に与える慣習は古来からあった。⁸ この慣習は、ローマにも受け継がれ、オウィディウスの *Fasti* 3.31-34 によると、レア・シルヴィアの見た夢に、2 本の椰子の木として **Romulus** と **Remus** が現れ、そのうちのより美しいほうがローマの偉大さを予言したという。⁹ キリスト教時代になって、椰子の木が勝利を意味する伝統は、キリストや殉教者の死に対する信仰の勝利を表象するために多用されるようになるが、後述するようにこうしたナツメヤシをめぐる古典の記述から、ナツメヤシにはさまざまな象徴的意味が付与される。古典作家の中でも特にプリニウスは絶えず再生し、死んだ葉の落ちた場所から新しい葉が現れる椰子をめぐる多くの話のひとつを繰り返し書いており、ナツメヤシをほとんど不死と信じられた木として象徴的に交換可能なものとした。¹⁰ 初期キリスト教徒のコプト、シリア、エジ

プト教会にとって、復活と再生の場、十字架の原型とされたアイコンであった。「椰子」と「不死鳥」にあたる言葉は、ギリシア語およびエジプトのコプト語では交換可能なので(*palma* の学名は *Phoenix dactylifera* である)、ローマのサンタ・プラセデの初期キリスト教のモザイク製作者は、実際に椰子の枝にこの後光のさした鳥を止まらせることができた。さらに5, 6世紀ごろのパレスティナで、巡礼者たちの間に、キリスト磔刑の十字架となった「生命の木」からしばりとられた聖油が入っているという銀やテラコッタの瓶(アンブラ)が流布するようになった。今日残っているその大半は、十字架を椰子の木の形で示している。¹¹ 初期キリスト教時代より、ナツメヤシは高い実用性ととともに、キリストに象徴される生命の木、さらにキリストの復活を象徴する永遠の勝利とみなされた木であった。

実際、ナツメヤシをプリニウスに代表される博物学的伝統による不死の象徴、そして古代メソポタミアよりローマにいたる初期キリスト教時代における生命と勝利の象徴とみなす伝統は、ルネサンス期の古典復興とともに広く受容されている。マルティン・ショーンガウアーの銅版画《誘惑のあとのイエス》(1470年ごろ)には、キリストの背後にすらりとしたナツメヤシが描かれており、その左に悪魔を象徴する猿のいるざくろの木が立っており、これは認識の木である。右側には鳥のいる榿の木が立っているが、これは生命の木でオーク材は腐らないと思われていたため永遠を表している。彼岸と此岸を表す木の間にはナツメヤシが立っており、ルルカーによれば、ここで地上の生と死をはじめとするあらゆる対立が止揚されるのである。¹² [図2] つまり、ナツメヤシはキリスト自身を表象し、罪と死に対する信仰の勝利と結びつき、聖画において殉教者のアトリビュートとなった。たとえば、古代のヒエログリフにとりわけ関心の深かった15世紀イタリアの画家、アンドレア・マンテーニャが1457年に完成したパドヴァのエレミターニ聖堂オヴェターリ礼拝堂に描いたフレスコ画〈聖



図2 マルティン・ショーンガ
ウアー 《誘惑のあとのイエス》
(1470年頃)

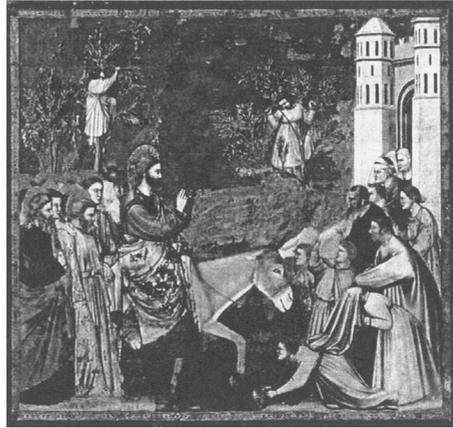


図3 ジオット 《エルサレム入場》
(パドヴァ、スクロヴェーニ聖堂、1303-05)

ヤコブの殉教への道行き》)において、背景となる凱旋門の上部の柱に、つば、トンドを伴ったナツメヤシの枝を描いているが、ナツメヤシの枝は信仰の「勝利」を表象している。¹³ *MND*によれば、中世を通じて、*palm* はほとんどの場合 *date palm* を指しており、それは「勝利」のエンブレムであった。¹⁴ このように、ナツメヤシの木は、具体的に多くのキリスト教美術作品のモチーフとなった。

前述したイエスのエルサレム入城における椰子の言及を例にとり、さらに作品を挙げよう。パドヴァにあるジオットの代表作、スクロヴェーニ聖堂 (Scrovegni Chapel) の聖画連作 (1303-1305年)のうち、《エルサレム入城》をみてみよう。左後方に描かれている人が登っている木は、ナツメヤシの木である。ロバに乗ったキリストや右後方のオリーブの木など、この壁画は、後の同様の聖画の模範となった重要な作品である。〔図3〕また、

フィレンツエのサン・マルコ修道院二階僧房にあるフラ・アンジェリコの《Noli me tangere》（我に触れるな）において、復活したキリストとマグダラのマリアの間に立つのも椰子の木であり、椰子の木、特にナツメヤシは、具体的な描写においても永遠の生命と勝利を表象しているのである。¹⁵〔図4〕 こうしたルネサンス期の芸術作品におけるナツメヤシの象徴的描写をふまえ、エンブレムブックにおけるナツメヤシの表象を検証していきたい。エンブレムブックはルネサンス期のベストセラーであり、あらゆる古典テクストの伝統を取り込んで発展したため、そこにみられる表象を整理することで、当時の芸術における知の受容の一例が看取できよう。

まず、初のエンブレムブック、アンドレア・アルチャーティの『エンブレム集』を取り上げたい。彼のエンブレム36番には、palmaを表象した



図4 フラ・アンジェリコ 《我に触れるな》
（フィレンツェ，サン・マルコ修道院，1440-41）



図5 Andrea Alciati, *Emblemata*
〈Augsburg, 1531〉



図6 Andrea Alciati,
Emblemata (Paris, 1534)

エンブレムがみられる。“Obdovrandum adversvs vrgentia”（「圧迫には確固として対せよ」）というモットーのもと、椰子の木に太い丸太が乗っている図（アウグスブルク、1531年）〔図5〕が、それ以後の版では椰子の枝に少年がぶら下がっている図が用いられており、ここでは1534年のパリ版を挙げておく。〔図6〕詩文に書かれているのは、博物学的な知識と、そこから引き出される教訓である。（ナツメ）ヤシの木は、重い荷を負うにつれて、アーチ状に反り返ること、そして甘い実を産み、食卓に供されると飲ばれること、さらに少年に幹を登ってそれらを集めるよう促し、確固たる心の持ち主は、それにみあった報酬を得るという教訓が延べられている。このうち、重い荷を負うと、アーチ状にそりかえるという記述は、プリニウスをはじめとする古典に拠った誤った知識である。プリニウスは『博物誌』において、木材の強度について以下のように述べている。

椰子の木も丈夫である。〔ポプラも〕逆の方向に曲がるからである。

すなわち、他の木はすべて下方に垂れてたわむのに、椰子は反対に上に反りかえる。¹⁶

甘い果実のくぐり、エラスムスの *Parabola*, 241 頁にも似た表現がある。¹⁷ 原文 *palma* は、椰子の総称であるが、ここで甘い果実に言及されていることから、この *palma* は棕櫚の類ではない。また、ナツメヤシと姿の似た別の椰子の木を考えてみても、ナツメヤシ属でフェニックスといわれるシンノウヤシは、アッサム、インドシナ原産、室内で栽培可能な低木だが幹がふつう数本束生、そして近世以降もっとも有用とされてきたココヤシは、熱帯島嶼の海岸に広く自生するが、20～30メートルにも育つ。大型の熱帯の樹木は、当時のヨーロッパの栽培技術では栽培不可能、またココナッツの実の大きさなど他の椰子の特長にも言及されていない。¹⁸ そこで甘い果実を産する *palma* は、ナツメヤシと想定してよいだろう。こうした博物学的な知識から一般的な教訓を引き出すというのは、エンブレム作者が用いた代表的な手法のひとつであるが、法学者かつ人文主義者であったアルチャーティの道徳的エンブレムにおける *palma* は、同時代の絵画作品に広くみられるキリスト教的なナツメヤシの表象、つまり生命の木や殉教に関わるものではないし、一般的な戦いの勝利を表すものでもない。しかし、アルチャーティのエンブレムにみられたプリニウスの伝統に従ったエンブレムは多数みられ、彼と同様の教訓は広く行き渡っている。たとえば、George Wither の *A Collection of Emblemes, Ancient and Moderne* (1638) の 172 頁には、アルチャーティの 1531 年版と同様の板を乗せた椰子の木が描かれている。〔図 7〕モットーはアルチャーティと異なり、“*Veritas premitur non Opprimitur*”（「真実は圧迫されるが、抑圧されはしない」）であるが、荷を負い押さえられても生い茂る椰子の木を前提にした点は同じである。詩文においてウィザーは、しばしば正しき真



図7 George Wither, *A Collection of Emblems* (London, 1638)

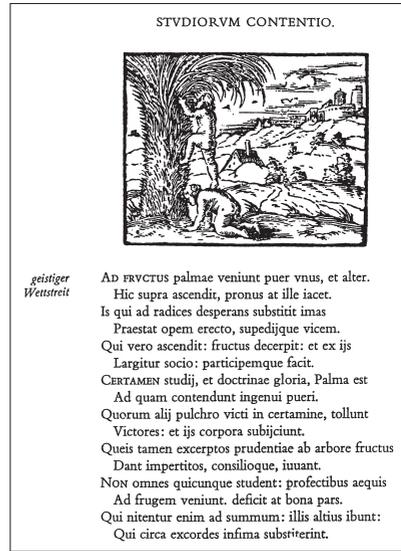


図8 Barthélemy Aneau, *Picta poesis...* (Lyons, 1552)

実が高位の邪悪な者によって圧迫されている現世にあって、神の永遠なる真実は椰子の木のように耐えて暴君に抑圧されないことを説いている。¹⁹

また、Barthélemy Aneau の *Picta poesis* . . . (1552)、S95 には、アルチャーティのリヨン版と同様、ナツメヤシの木に登ろうとして協力している少年二人が描かれている。〔図8〕モットーはアルチャーティと異なり、“*Studiorum contentio*”（「追求における熱心さ」）であり、こちらは甘い果実を求めて力を合わせている少年を通じて、目的のために一層の努力をする必要を説く。²⁰ これらはともにアルチャーティと同様、道徳を引き出すにとどまっている。人生における戒めや真理を通じて人々を教化しようとする人文主義的なエンブレムにおいて、*palma* は忍耐や熱意を通じた勝利という一般的な教訓を述べていると考えられる。

こうした教訓のほかに、椰子の木はローマと関わる栄光やギリシア語名との地口から永遠の意味も付与されている。イングランド初のエンブレム作者とされる Thomas Palmer のエンブレム写本、*Two Hundred Poesees* (SloaneMS 3794) には、これらすべてを表象したエンブレムが含まれている。パーマーの作品は、マニングによるとジョンソン、ドレイトンやキャムデンといった同時代の文人たちにもよく知られていた。しかし彼は出版を望んでいなかったため、長く文学史から忘れ去られ、またローズマリー・フリーマンなど 20 世紀の研究者の誤解から、この写本の成立年代も正しく把握されてこなかった。²¹ 彼のエンブレムを具体的に説明する前に、ここでパーマー自身について簡単に触れておく。パーマーは、オックスフォードに学び、1557 年、M. A. を取得している。同年、新しく設立された St. John's のフェローとなり、このコレッジの最初の修辞学講師となった。1564 年にエセックスに土地を相続してフェローを解任されるが、その後 3 年間、コレッジに居住し続けた。この間に新しくオックスフォードの学長となったレスター伯に、この写本を献上したと考えられる。マニングは、エリザベスがレスター伯に 100 人もの随行員を許可したという、二人の親密さが際立つ 1565 年（ロバート・ダドレーは 1564 年、伯に任じられているので、レスター伯と呼ぶ）を、レスター伯の気前のよさから宮廷への登用を願ったパーマーがこの写本を作成し、献上した年だと推定している。²² この写本に含まれるほとんどすべてのエンブレムは、レスター伯への個人的で、あからさまにではなくエソテリックなヒエログリフのような方法で提示された賛美や助言に満ちている。エンブレムを応用した余興に使われる舞台の凱旋門、馬上槍試合の盾の紋章といったエリザベス朝のクリスマスなどの行事の余興は、1560 年代レスター伯の動向とともに始まった。²³ 60 年秋、妻が謎の死を遂げると、レスターはスペインの助力を借りてエリザベスとの結婚を画策し始めた。2 代に渡って反逆

罪で訴えられたダドレー家に協力しようとする有力者は一人もいなかったからである。この不穩な企てはすぐにウィリアム・セシルの知るところとなり、彼の思いは遂げられることはないが、異例の出世に周囲の嫉妬や陰謀は常に彼とともにつきまとっていたであろう。パーマーの願った栄達もかなえられないのであるが、レスター伯との関連で、エンブレム作成の動機を確認できよう。またパーマーの書は、大陸のエンブレムブック、アルチャーティ、アノー、ヴァレリアーノ、コスターなどから図版や詩文を借用し、詩的に優れているとはいえないものの、翻訳文学の盛んになりつつあったエリザベス朝文壇において、そのさきがけとなった。実際、イングランドにエンブレムという形式を紹介したのはパーマーであり、イングランドののちのエンブレム作者である Willet や Thynne は、パーマーが用いたミーターを使用している。²⁴ パーマーの写本は、1560年代前半、エリザベスの即位にしたがってオックスフォードに古典研究復興の傾向がみられたひとつの証拠となっている。

彼の扱ったエンブレムの多くは、アルチャーティが友人エラスムスの *Adagia* から広く引用したように、金言を使用している。²⁵ この時期の人文主義者同様、パーマーの場合も、エンブレム作成の根本にキリスト教的な世界観がある。古典の哲学書などから処世術を引用しても、それはキリスト教的な寓意という側面から再調整されている。イングランドにおけるエンブレムの伝統は、最初時から宗教的側面があった。パーマーの後、ほどなくして1569年に出版される *A Theatre for Worldlings* の作者、Van der Noot は、オランダ人新教徒（カルヴァン主義者）で、スペインの支配下にあったアントワープからイングランドに亡命してきた一人である。エリザベスに捧げられたこの書は、もともとはオランダ語で書かれ、フランス語はじめ、諸言語に翻訳され出版された。パーマーの作品は写本であったので、印刷されたという点では、これがイングランド初のエンブレムブッ



Sonets.

*Then I beheld the faire Dodonian tree,
 Upon seven hills throw forth his gladfime shade,
 And Conquerers bedecked with his leanes
 Along the banks of the Italian streame.
 There many ancient Trophies were erect,
 Many a spoile, and many goodly signes,
 To shewe the greatnesse of the stately race,
 That erst descended from the Trojan blood.
 Rauiht I was to see so rare a thing,
 When barbarous villaines in disordred heape,
 Outraged the honour of these noble bowes.
 I heard the tronke to grone vnder the Wedge,
 And since I saw the roote in his disclaime
 Sende forth againe a swinne of forked trees.*

図9 Van der Noot,
A Theatre for Worldlings
 (London, 1569)

クである。モットーがついてないため、この書をエンブレムブックの範疇に入れないとする考えもあったが、現在ではエンブレムブックとして認められている。²⁶ そのC iiivにおいて、ローマの丘に立つ椰子の木と、川（ティベール）向こうで男たちに引き抜かれる椰子の木とその傍らで育つ椰子の木を描いて、蛮族に征服され虐げられても立ち上がるトロイの血をひくローマの故事から、プロテスタント王国としてカトリックの強国に立ち向かうイングランドを、引き抜かれてもまた生い茂る椰子の木になぞらえている。〔図9〕ここでも椰子の木は、勝利の象徴として描かれている。新旧の宗教対立が深まる当時のヨーロッパにおいて、神の被造物すべてに神の姿をみようと、草木にも意味を見出してきたキリスト教釈義学の伝統が看取される。

さて、パーマーが“poosee”と呼ぶエンブレムのうち、椰子の木をあつかったものは3点ある。まず、エンブレム 65番は、

1531年版ののちのアルチャーティの版、たとえば1534年版（パリ）に拠っている。図版はそのまま借用、モットーは基本的にアルチャーティに沿っているが、詩文では甘い実を採るよう少年に呼びかける後半部への言及がない。〔図10〕しかし負荷をかけられればかけられるほどにそれをはねかえそうとする椰子の木を描いたという点は同じである。パーマーは、この

65. A good harte will not yelde to them that woulde
oppres yt.



Pvrposest thou, thow pevishe boye
to plucke the palme to grounde?
A tree that stedfaste in yt self
hathe evermore ben founde?
Loe how the palme his braunches spredes, 5
and is not made to stoope:
More that he is oppreste with force,
more strives he to get vp.
Even so it fares with valiaunte hartes,
and men of courage stoute: 10
Rancor of foes can dere them naughte,
what so they goe asoute.

図 10 Thomas Palmer, *Two Hundred*
Poosees (Slone MS 3794) no.65

椰子の木から力で圧迫されても、それを跳ね返そうと戦う人は、勇敢な心の持ち主であると説いている。アルチャーティでは、困難に耐える堅固な心があって、甘い果実のような報酬を得られるとして、堅固さ（*constantia*）が称揚されているが、パーマーでは圧迫に対して戦う姿勢が前面に打ち出されている。このエンブレムと見開きで続くエンブレム 66 番は、錨にイルカという有名な図版で、困難（嵐）に対して安心を提供する錨、そして人間に近い存在で、人間を愛するイルカをキリストにたとえ、神こそ苦境における慰めであると讃えている。パーマーは、このエンブレム集で、2つ続きのエンブレムでひとつの教訓を生み出す構成をしばしば採用しており、ここでは 66 番と一組となって、困難に立ち向かい戦う善なる心を讃えており、それは信仰における堅固さを示唆している。この点で甘い

実を得るための堅固さを述べた世俗的なアルチャーティと異なっている。アルチャーティと似た世俗的なモラルを説いた椰子の木は、Hadrianus Junius の『エンブレム集』(1575年)におけるエンブレム9番である。すらりと高い椰子の木の根元に、蛇と蛙がいる図版で、モットーは“*Invidia integritatis assecla*”(「嫉妬は高潔の同伴者」)である。詩文は、不快な声の蛙や毒を出す蛇に悩まされながら立つ椰子の木から、高い地位にあるものへ常につきまとう嫉妬への警告を発している。このエンブレムは、後年1586年にライデンで出版されるGeoffrey Whitney, *A Choice of Emblemes*(『エンブレム選集』)の118頁に図版とモットーがそのままに採られている。〔図11〕ホイットニーは、詩文を元のユニウスの4行の詩行を倍の8行に敷衍し、さらに詳しく教訓を説いている。前半の4行で図版の説明を、後半の

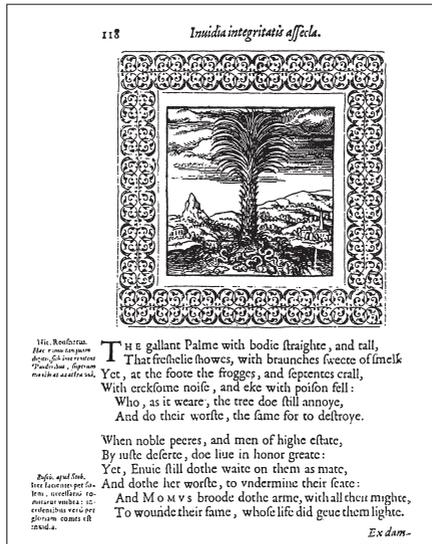


図 11 Geoffrey Whitney, *A Choice of Emblemes* (Leiden, 1586)

34. All be not lyke witted.



Two boyes goes forth to clyme the palme
that store of dates dothe beare:
The tone lackes harte and bydes benethe,
the tother would ... there.
The firste lies downe, and holdes his backe, 5
to helpe his fellowes arte:
Who gettes him vp, and speedes him well,
and deales his fellowe parte.
In commen schooles of exercise,
where many studentes be, 10
All be not like: some poorely lernde
some noble clarkes we see:
Some teach, some learne, some doe procede,
some never takes degree:
One dothe supporte an others payne, 15
some thrive, some never thee.

図 12 Thomas Palmer, *Two*

Hundred Poosees (Sloane MS 3794) no.34

4行で、そこから引き出される教訓を説明している。高貴な人には嫉妬がつきもので、彼の名声を貶めようとしてモモスの猛攻撃にさらされるが、そのことで真理が与えられるとしている。椰子の木は、嫉妬にさらされる高貴な身分の者への一種の忠告になっている。『エンブレム選集』は、宮廷への野心をもったホイットニーがレスター伯に捧げたものなので、こうした教訓を説いたエンブレムが選ばれたのであろう。²⁷

次にパーマーのエンブレム 34 番では、Barthelemy Aneau から図版を借用し、ナツメヤシの木を上ろうと協力している二人の少年が描かれている。〔図 12〕詩文はアノー同様 16 行で、2 行目に ‘dates’ とあり、パーマーでも palm は、ナツメヤシを指している。モットーは、“All be not lyke witted”（「すべてのものが同じように知恵があるわけではない」）であり、詩文で具体的に説明されている。ナツメヤシの実をとるために、一人はか

かんで地面にひざまづき、その背中にもう一人が乗り、幹を登っていこうとしている。ここから学校の生徒はみな能力が異なり、よく学び、上に進学して学位をとるものもいれば、とれないものもある。人は他の者の苦痛を支え、成功したりすると説いている。アノーはアルチャーティをさらに進めて、果実を求めて協同することから、学びにおける協力の大切さを導いている。より具体的に学校に言及し、“commen schooles of exercise”（9行）について書いている。上に立つ者は他人の痛みを理解しなくてはならないことを示唆しており、これも世俗的な教訓のエンブレムといえよう。

パーマーが扱った3つめの椰子の木のエンブレムは、彼の技巧が最もよく表された興味深いものである。ナツメヤシの木とその上に座す不死鳥が描かれたエンブレム 18 番である。[図 13] モットーは“Baptism”（「洗礼」）である。これは、アノーのエンブレム 98 頁をパーマーがデザインしなお

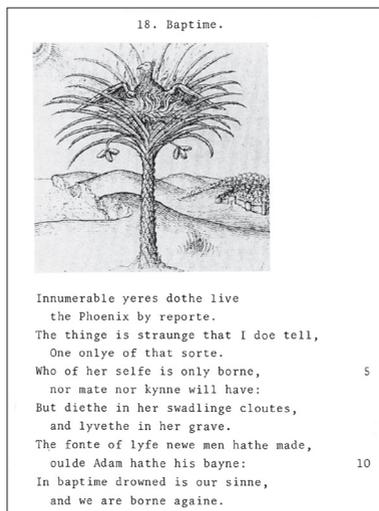


図 13 Thomas Palmer, *Two Hundred Pooses* (Slone MS 3794) no.18

したもので、エピグラムはだいたいアノーを踏襲しているが、アノーの図版に不死鳥を加えたのはパーマーである。²⁸ 椰子の木が図像学的に勝利を、特にこのキリスト教的な文脈では罪と死に対する勝利を表すことは、前に述べたとおりである。そして自らの灰の中から蘇るという不死鳥は、再生と不死や永遠の象徴であり、なによりキリストの復活（resurrection）というタイプの表象である。²⁹ 詩文でいわれるように、モットーである洗礼とは、罪を悔い改め、神の子として新しく生まれ変わることであり、ナツメヤシの木と不死鳥という表象は、勝利した永遠の新生、キリストを謳うにふさわしい。しかし不死鳥はまた、世俗的な主君の栄光を讃える象徴としても多用されている。特にエンブレムよりも秘儀的であり、個人的なインプレーサ（あるいはディヴァイス）に使用されている。不死鳥がひんぱんに文飾や装飾に用いられていたイングランドにおいて、例をあげると、Henry Peacham が *Minerva Britanna, or A Garden of Heroical Devises...* (London, 1612) の 19 頁でソールズベリー伯爵に捧げたディヴァイスがあげられる。〔図 14〕不死鳥が炎から姿を現している図版を説明する詩文では、不死鳥とソールズベリー伯を比較し、国家に身を捧げた伯はやがて永遠の名声を得るとする。エリザベス自身も肖像画などにおいてしばしば不死鳥と比較され、Henry Godyere は *The Mirrour of Majesty; or, The Budge of Honour* (London, 1618) の第 3 番で、まさに女王は不死鳥であるというエンブレムを作成している。³⁰ そこで、パーマーのこのエンブレムは、世俗的かつ表面上は、エリザベス女王の寵愛を集めるレスター伯の栄光が長かからんことを訴えているものと考えられる。しかし、マニングが指摘しているように、このエンブレムには更なる意味が読み取れよう。洗礼とは教会を選択する儀式であり、また名づけの儀式でもある。椰子の木（= palm）は、詩人自身の名前 Palmer を想起させ、個人的に彼はこのエンブレムにおいて、一巡礼者（palmer）として神に侍り、墮落し

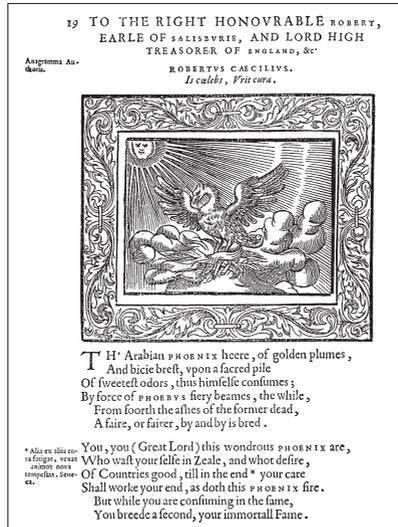


図 14 Henry Peacham, *Minerva Britannica, or a garden of heroical Devises* (London, 1612)

た Old Adam から生まれ変わって新たに (レスター伯とともに) 歩む自らの家門への自負心を示したと考えられる。³¹ 国外での宗教をめぐる主にフランスやスペインとの対立はもちろん、国内の宗教統一が重要な問題であった当時、「洗礼」というモットーからも、このエンブレムは、パーマー自身の国家と教会への忠心を表明しているのではないだろうか。

エンブレムブックは、初期のヒューマニストによる啓蒙のかつ道徳的なものから、宗教戦争の激化に伴って、新旧両陣営から宗教的なエンブレムブックが量産されるようになる。こうしたなかで、椰子の木の表象もまた、より宗教と密接に関連してくる。たとえば、イングランド人イエズス会士である Henry Hawkins の *Parthenia Sacra, or, the Mysterious and Delicious Garden of the Sacred Parthenes* (Paris, 1633) の第 14 番に、パーマー同様、

椰子の木と不死鳥を描いたエンブレムがある。この書は、当時イエズス会による大陸およびアメリカや東インドにおける伝道区に起こったマリア信心会のために書かれたもので、読者にはホーキンス同様のイングランドからの亡命者が含まれる。このエンブレム集は、オリーブや鳩といった動植物や真珠、海などの事象あわせて22のシンボルを、それぞれ二枚の図版 (Device and Emblem)、一篇の詩 (Poesie)、そして6編の散文 (Character, Morals, Essay, Discourse, Theories and Apostrophe) という構成で表象した聖母への賛美集となっている。ホーキンスは、ディヴァイスとエンブレムに関して、インプレーサやディヴァイスでは *pictura* に二つ以上の事物を含めないこと、エンブレムはそれ以上のものを含めてよいという伝統的規則を守っている。³² その上でシンボルに新たな神学上の解釈を与えているのである。また、聖母マリアに対するディボーションには、初期キリスト教時代より雅歌の伝統による庭園のシンボリズムが存在した。ホーキンスはその伝統をふまえ、庭園という場所を設定して聖母の霊的力についての瞑想を繰り広げるのである。瞑想の入り口となるディヴァイスに描かれているように〔図15〕、まずこの木の特徴が説明される。

The Palme is the inuincible Champion among trees, whose chiefest point of valour consists in bearing iniuries and oppressios, without shrinking. (151) ³³

すでに指摘してきたように、この木の特徴としてもっとも讃えられるのは、縮むことなく傷や圧迫に耐える点であり、ホーキンスもこの点は同様である。彼は椰子の木をアトラスにもたとえ、荷を負うほど強く耐えるこの木の名も特徴も不死鳥の住処にふさわしいと説く。さらにこの木が雌雄の別があり、有性生殖であることも、特別な価値を与えている。雄木がそ



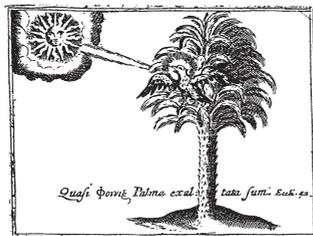
図 15 Henry Hawkins, *Parthenia Sacra, or, the Mysterious and Delicious Garden of the Sacred Parthenes* (Paris, 1633)

ばにないと雌木が決して切実しなかったので、椰子は誠実な恋人と信じられてきた。³⁴ ここからホーキンスはキジバトやペネロペーになぞらえて、一対の椰子の木は婚姻のヒエログリフという。これは霊的にみれば、キリストと祝福された聖母との婚姻となる。このことが一層具体的に示されているのがエンブレムである。〔図 16〕 椰子の木に不死鳥がいて、太陽のほうを向いている。そしてモットー、“*Quasi Palma exaltata sum*”（「椰子のように私は高く頭を上げる」）に明らかであり、またエンブレムに続く *The Theories* において言明されているように、聖母は決して枯れない椰子の

木のようにであり、ゆえに彼女が身ごもったキリストは、不死鳥のように不屈で再生復活するのである。

Ponder Lastly, that as the Palme ever flourisheth and never withers, so our Incomparable Mother of God, had alwayes fresh and flourishing thoughts, being holie and chast; green and intentions, because most pure and neat; and green and flourishing affections, because very livelie and active in the service of the Highest, (161)

THE PALME: 159
THE EMBLEME.



THE POESIE:

Phenix (in Greeke a Palme) doth aptly fate
 With that rare bird the Phœnix, here the fruit;
 Which, when bright Phœbus scorching beames displa-^{7be}
 A nest of Spices (to renew his dayes, ^{7raije.}
 By a second birth) vpon this tree he makes:
 Where burnt to ashes, so himself forsakes,
 Made yong, that he retaines what he had byn,
 Thus th'only Sonne of God, t'abolish sunne,
 Midst burning flames reuegeth with mortall plume,
 Reuiues man's nature, which he doth assame;
 The Virgin-Phœnix is the fruitfull tree,
 Where God in flames of Loue, new-borne would be.

☒ 16 Henry Hawkins, *Parthenia Sacra, or, the Mysterious and Delicious Garden of the Sacred Parthenes* (Paris, 1633)

椰子の木は、ここでは生命の木としての聖母の象徴となっている。デイヴァイスに挙げられた圧迫に耐えるという長所、ギリシア語 *phaenix* は即ち *palm* という語源との関連や、キリストのエルサレム入城にちなんで勝利のしるしであったことから、堅忍な信徒の信仰の勝利を表すにふさわしいのである。ホーキンスは、ローズマリー・フリーマンが指摘したように、椰子の木にまつわるすべての伝統を結集して、14 番を作り上げている。³⁵ こうした信仰の勝利を讃える椰子の木は、同時代の詩人、ヘンリー・ヴォーンHenry Vaughan の詩にもみられる。ヴォーンは 17 世紀英国の代表的な宗教詩人のひとりとして評価されている。彼の「聖なる詩と個人的な祈り」を集めた代表作『火花散らす火打石』(*Silex Scintillans*, 1650) には “The Palm Tree” という題の詩がある。この植物の枝は重荷をかけられればかけられるほどたわみ、それに耐えることと、墮落後の自らの肉体とを比較する。話者は魂で、友である肉体に呼びかけている。

．．．． this plant, you see

So pressed and bowed, before sin did degrade

Both you and it, had equal liberty

With other trees: but now shut from the breath

And air of Eden, like a malcontent

It thrives no where. This makes these weights (like death

And sin) hang at him; for the more he's bent

The more he grows. (2-9) ³⁶

．．． この植物は、

甚だ圧えつけられ頭を下げてきて 罪が君とそれとの両方を
辱めないうちに、他の木々と同等の自由を

享受したのだったね。しかし今や、エデンの園の
呼吸と空気から閉め出されてそれは、不平分子のように
繁茂する所はどこにもない。これでこういう重圧が（死や
罪のように）彼に押し掛るのだ、身を曲げれば曲げる程

ますます生長するのだから。³⁷

次にソロモンの神殿の装飾にあった椰子に言及し、この木が「絶えず（隠されて）繁殖し、芽生え、生育してゆくおよそ値のつけられない木、不滅の果実を宿す木」（14-16行）とうたう。そして、この木のもとには「自らの競争を走りつくし、戦い抜き、その戦いに勝利し」、権力者に媚ず、神の御心になうためのみに生きた霊たちが集まるといふ。ゆえにこの木は聖徒たちの忍耐を、そうあるべき堅忍な信仰を表象している。

Here is the patience of the Saints: this tree

Is watered by their tears, as flowers are fed

With dew by night; · · · (21-23)

ここに、聖徒たちの忍耐がある。この〈木〉は
彼らの涙によって潤されるのだ、花々が夜露に
養われるように。

この詩においてヴォーンは、自らの魂が神の恩寵を通じて経験した信仰上の改心と再生³⁸を椰子の木に託して確認していると思われる。



図 17 *Eikon Basilike* (1649) 口絵

さらに、ナツメヤシの木が信仰と関連して表象されている有名な例は、1649年1月に処刑されたチャールズ一世が、まるで国教会を守るために殉教したかのようにみなされている処刑ののち2、3日して出版された *Eikon Basilike* (1649) (『王の肖像』) の口絵である。ひざまづいて祈禱しているチャールズ一世の左側に、錘を両側にさげた椰子の木が描かれている。〔図 17〕 錘に耐えるナツメヤシは、チャールズの教会に対する屈しない誠実な信仰を示唆し、彼が敗残の王から栄光の殉教者へと変貌するのに影響が大きかった書である。年内のうちに 36 版を数え、そこではチャールズの悲劇をキリストの受難と同一視する言説がとられているが、その内容を雄弁に表しているのがこの口絵であった。³⁹

このように、16、17 世紀を通じて、椰子の木 (多くはナツメヤシ) を世俗的にも宗教的にも忍耐と結び付けるプリニウスの伝統は、大変広く、深く行渡っていた。しかし、これは近代科学の発展とともに誤った植物学的知識と認められるようになる。コンラート・ゲスナーによる博物学的書

にはアルチャーティなどエンブレムからの欄外注がつけられているが、啓蒙時代に入って、椰子の木が忍耐を表象する機会は、寓意像表現などに限られてきたと思われる。たとえば18世紀半ば、リーパの『イコノロギア』英語版である Hertel 版（1758～1760）では、Veritas《真理》の像（50頁）とともに Crescens Aetas《加齢》の像に重荷に耐える椰子の木がでてくる（42頁）。《真理》は、右手に太陽を、左手に本と椰子の枝を持った女性として表象されている。〔図18〕アトリビュートの説明文によると、光の源である太陽は真理の象徴で、真理に到達するには科学など勉強が必須であるため、本を持っている。椰子の枝、そして左側に立つ椰子の木は、この



図18 Cesare Ripa, *Iconologia*
Hertel 版（1758-60）《veritas》

木の障害物に対する耐性 (the tree's resistance to obstacles) が、真理の特性と通じているため描かれている。⁴⁰ また、『加齢』において、そのラテン語のエピグラムが示すように、椰子の木はまさにアルチャーティ以来の文脈において、用いられている。

Palmarum gravidos ut tendit ad aethera ramos

Virtutem juvenes quaerite pro pretio.⁴¹

(Just as the palm tree raises its weighted branches toward sky,
so should you, O Youth, seek virtue as you recompense.)

図では若い女性が上に錘を乗せた椰子の木を指差している。椰子の木がどんな錘でたわまされても決して折れたりせずに成長し続けることは、この寓意の鑑となっているのである。植物学上誤った情報であるが、椰子の木はプリニウスやキリスト教釈義学はじめとする寓意の伝統においては、忍耐の徳を説くのに利用され続けた。イングランドの場合、宗教をめぐる国内外の葛藤もまた、椰子の木の寓意が利用される要因でもあったろう。リーパに代表される『真理』像は、18世紀にはいつてからもぼつりぼつりと出版されたエンブレムブックにもしばしばみられる。たとえば、1775年に出版されたコンパクトでエレガントな John Huddleston Wynne, *Choice Emblems, Natural, Historical, Fabulous, Moral and Divine, for the Improvement and Pastime of Youth* には、リーパと同様、右手に太陽、左手に椰子の枝を持った女性像で『真理』が表されているが、詩文に椰子への言及はいっさいない。⁴² [図 19] 19世紀にはいると、植物は花言葉に代表される寓意的な意味を託され、花の統語法というべきものが生み出された。⁴³ 多くの floral emblem book が出版されるが、そこに登場する

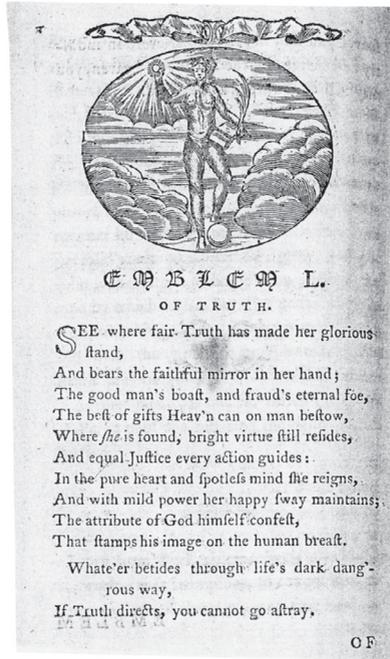


図 19 John Huddleston Wynne, *Choice Emblems, Natural, Historical, Fabulous, Moral and Divine, for the Improvement and Pastime of Youth* (1775)

椰子の木は、古代より勝者に捧げられたという **victory** を表示するのみである。園芸家として有名だったヘンリー・フィリップスの *Floral Emblems* (1825) においても、**Victory** の項にのみ、**Palm Tree** は採られているが、椰子の木の図版はない。代わりにシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』1幕2場131行からの引用があり、椰子の木が勝利の象徴であることを簡潔に述べているのみである。

Victory

Palm. – Palma.

“Get the start of the majestic world,
And bear the palm alone.”

Shakespeare.

The branches of palm-trees were anciently carried before
The conquerors in warlike processions to show that they had
Overthrown the enemy; and hence the palm became the
symbol of victory and superiority. ⁴⁴

南洋に育つ椰子類は、キリスト教国が新たなエデンの創設を夢見た新大陸への進出、その後の植民地獲得の途上で、古典的でキリスト教的な忍耐よりは、その高い実用性やエキゾチックな側面が注目され活用されていったと推察される。ルネサンス期以後の椰子の木の表象に関しては、今後さらに追及していきたい。

* 本稿は、成城大学特別研究助成に基づく研究成果の一部である。

注

- 1 大槻真一郎編『プリニウス博物誌：薬剤植物篇』（八坂書房、1994）IV-97、295 頁。
- 2 桑田秀延他監修『聖書事典』（日本基督教団出版局、1961）632 頁。
- 3 嶋田秀誠編『跡見群芳譜』巻6：外来植物譜 www2.mmc.atomi.ac.jp。（2009.9.15）やしの項参照。参考までに写真を付す。
- 4 桑田他監修『聖書事典』、633 頁。
- 5 『風俗画法』第273号（東陽堂、明治36年）22 頁。
- 6 サイモン・シャーマ著、高山宏、梅正行訳『風景と記憶』256 頁、および桑田、参照。
- 7 マンフレート・ルルカー著、林捷訳『シンボルとしての樹木—ボッスを例として』（法政大学出版局、1994）72 頁。
- 8 ルルカー、120 頁。
- 9 Mirella Levi D'ancona, *The Garden of the Renaissance: Botanical Symbolism in Italian Painting* (Firenze: Leo S. Olschki Editore, 1928), p. 279.
- 10 シャーマ、前掲書、357 頁。
- 11 シャーマ、前掲書、256～257 頁。
- 12 ルルカー、前掲書、121～122 頁。
- 13 伊藤博明『綺想の表象学—エンブレムへの招待』（ありな書房、2007）53 頁、および図18参照。
- 14 Sherman M. Kurn ed. *Middle English Dictionary*, part PI (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1981), p. 575.
- 15 美術作品に描かれたナツメヤシに関しては、D'ancona, *op.cit.* pp.279-289 に詳細な解説とリストがある。
- 16 大槻真一郎編『プリニウス博物誌：植物篇』（八坂書房、1994）V-81、223、281 頁。
- 17 アルチャーティの1531年版、1534年版に関しては、Peter M. Daly ed. *Andreas Alciatus 2: Emblems in Translation* (Toronto: University of Toronto Press, 1985), emblem 36、また *Andrea Alciato, Emblemata* (Lyons, 1550), trans. by Betty I. Knott with an Introduction by John Manning (Aldershot: Scolar Press, 1996), p.43 を参照。

- 18 ジョン・プレストは、ルネサンス時代の「探検家は椰子の木に注目し続けた。ナツメヤシは何世紀もの間、知られた存在であり、無言で傷に耐えると評判だった。・・・ココヤシがそれ以上に目立ったのは、その木から採れないものなどないようにみえたからだ。・・・一本の木が果実酒、油、酢、バター、糖、衣にもなる。・・・(しかし) 皮肉なことにココヤシは大の楽園家もイギリスの庭園に育つとは思えなかった、ただひとつの植物であった。」と述べ、すでに 1658 年のオックスフォード植物園の目録には「世界中のあらゆる遠隔地」からも標本が届き、2 千種の植物が記載され、そのうちイギリス産はわずかに 6 百種であったというが、大型の温室設備、つまりのちのパームハウスが建設可能となるのは 200 年以上のちのことである。ジョン・プレスト著、加藤暁子訳『エデンの園－楽園の再現と植物園』（八坂書房、1999）132～136 頁参照。
- 19 George Wither, *A Collection of Emblemes, Ancient and Moderne*(1635), intro. by Rosemary Freeman, Bibliographical Notes by Charles S Hensley (Columbia, SC: University of South Carolina Press, 1973), p.172.
- 20 Arthur Henkel und Albrecht Schöne, *Emblemata: Handbuch zur Sinnbildkunst des XVI. und XVII. Jahrhunderts* (Stuttgart, J.B.Metzler, 1996), p.197.
- 21 John Manning ed. *The Emblems of Thomas Palmer: Two Hundred Poosees, Slone MS 3794* (New York: AMS Press, 1988), pp.ii-vi. パーマーの履歴についても本書のこの箇所によくを負っている。
- 22 Manning, *op.cit.* pp.iv~v.
- 23 玉泉八洲男『シェイクスピアとイギリス民衆演劇の成立』（研究社、2004）108 頁。
- 24 Manning, *op.cit.*, p.vii.
- 25 アルチャーティとエラスムスの関係については、Manning, *op.cit.*p.xlviii の注 118 において、詳細な解説があるので、参照されたし。
- 26 Peter M.Daly ed. *Jan van der Noot A Theatre for Worldlings* (1569) in *The English Emblem Tradition 1: van der Noot, Giovio, Domenichi, Whitney* (Toronto: University of Toronto Press, 1988), pp.5-6.
- 27 ホイットニーとレスターの関係については、Geffrey Whitney, *A Choice of Emblemes*, intro by John Manning (Aldershot: Scolar Press, 1989) p.4 参照。

- 28 Manning, *op.cit.*, p.xxxii.
- 29 Giovanni Pierio Valeriano Bolzani, *Hieroglyphica* (Basle: M.Isengrin, 1556), fo. 144r., Manning, *op.cit.* p.xxvi に述べられているように、ヴァレリアーノ・ヴォルザーニの『ヒエログリフィカ』は、パーマーの主要な材源のひとつであり、キリスト自身が宗教の神秘を *parables* で語ったごとくにヴァレリアーノが秘儀的に示した手法をパーマーは受け継いでいる。
- 30 Mary V. Silcox ed. H. G. *The Mirrour of Majestie* (London: William Jones, 1618) in *The English Tradition 4: Camden, H. G., Van Veen* (Toronto: University of Toronto press, 1998), p.55. 同じモットーで、ホイットニーの 177 頁にも不死鳥のエンブレムがあり、同郷の士に捧げている。
- 31 Manning, *op.cit.*, p.xxxii.
- 32 Henry Hawkins, *Pantheonia Sacra* (1633), intro. by Karl Josef Hölting (Aldeshot: Scolar Press, 1993) p.10.
- 33 ホーキンスの引用は、Hölting, *op.cit.* に拠る。
- 34 ジョン・プレスト、前掲書、P137.
- 35 Rosemary Freeman, *English Emblem Books* (London: Chatto&Windus, 1948), pp. 150–151.
- 36 *Henry Vaughan: The Complete Poems* ed. by Alan Rudrum (New Haven: Yale University Press, 1981), p. 253.
- 37 ヴォーン の訳は、森田孟訳 (『成城文芸』第 209 号、47–48 頁) および吉中孝志『ヘンリー・ヴォーン詩集—光と平安を求めて』(広島大学出版局、2006) 299–300 頁を参照した。
- 38 カール・J・ヘルトゲン著、川井・松田訳『英国におけるエンブレムの伝統—ルネサンス視覚文化の一面』(慶応義塾大学出版会、2005) 127 頁。
- 39 Graham Parry, *The Golden Age Restor'd: The Culture of the Stuart Court, 1603–1642* (Manchester: Manchester University Press, 1981), p.252.
- 40 Cesare Ripa, *Baroque and Rococo Pictorial Imagery: The 1758–1760 Hertel Edition of Ripa's 'Iconologia' with 200 Engraved Illustrations*, intro. by Edward A. Maser (New York: Dover Publications, 1971), p.50.
- 41 Ripa, *op.cit.*, p.42.
- 42 John Huddleston Wynne, *Choice Emblems, Natural, Historical, Fabulous, Moral and Divine, for the Improvement and Pastime of Youth.* . . (London:

Chapman…For George Riley…, 1775), pp.184–187.

43 ヘルトゲン、前掲書、235–237 頁参照。

44 Henry Philips, *Floral Emblems*(London: Sannders and Otley, 1825), p.316.